



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ナラとノナラ
Author(s)	中野, 友理
Citation	北海道大学留学生センター紀要, 9, 22-38
Issue Date	2005-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/45653
Type	departmental bulletin paper
File Information	BISC009_002.pdf



ナラとノナラ

中 野 友 理

要 旨

本稿では、条件節を導く接続形式ノナラが持つ、ナラとは異なる機能について分析する。これまでの多くの研究で、ナラとノナラは意味的に相違がないものとされてきた。しかし本稿では、ノナラにノダの機能が受け継がれており、ナラとは違った機能があると考ええる。このことを前提に、ナラとノナラにおいて用法上相違が生じる場合の原因を明らかにし、ノナラの特徴を解明する。ノナラに受け継がれるノダの機能は拙論(中野2004a)における定義に基づき、話し手の情報領域への位置づけという観点からノナラを考える。

ナラと異なるノナラの機能は二つある。一つは、ノナラが導く節の内容が話し手によって自身の情報領域に既に位置づけられた情報であるということである。話し手本人は、ノナラが接続する節の情報を真であるとみなしている点でナラとは異なる。もう一つは、ノナラの導く内容は話し手が主観的に自身の情報領域に位置づけたものだということである。したがって、客観的にも明らかに真であるとみなせるような情報をノナラで提示するのは不自然である。

以上のように、ノダの機能は、ノナラのような従属節においても見られることが本稿で明らかにすることができた。以上のような研究は、今後ノダが関わるとされる従属節の接続形式、ひいてはノダそのものの意味機能の解明にも有意義である。

【キーワード】 ノナラ、ノダ、話し手の情報領域、既定化

1. はじめに

主節の内容の条件を提示する従属節では、ナラという接続形式が用いられることがある。

(1)a. 出かけるなら、早い方がいいよ。

b. 出かけるのなら、早い方がいいよ。

(1a)のナラは(1b)のようにノナラに置き換えることもできる。従来、(1a)と(1b)の意味は同じであり、ナラとノナラは意味的にも機能的にも相違ないとされることが多かった。確かに、(1)の二つの例文の違いを意味機能や、発話における環境などの点から明確に区別するのは難しいであろう。しかし、だからといって「ナラとノナラは同じである」と容易に結論づけることは妥当であろうか。

主に機能主義に基づく研究分野においては、Bolinger (1977) 等多くの研究者によって、ある二つの文の形式が異なれば意味も異なるということがこれまでに多くの具体例を基に主張されており、近年の認知言語学の分野でも広く共有された考え方といっていいだろう。この考えに基づけば、ナラとノナラに関しても相違があつて当然といえる。ナラとノナラが同じ言語環境で同じ命題を提示する文に用いられたとしても、意味や機能まで同じとは限らないのである。上のような考えに基づき、本稿では、ノナラがナラとは異なる機能を持つと考え、その相違点とは何かを明らかにしていく。

では、ノナラの持つ、ナラとは異なる機能がどのようなものかと言うと、その機能はノナラがノダ文の意味機能を受け継いだことによって生じると考えることができそうである。そもそもナラとノナラの形式的相違は、ノナラがノダ文にナラが接続されたものであることから生じると考えられる。上の(1a)(1b)の従属節の接続は、(2)のように説明することができる。

(2)a. (1a)の従属節「出かけるなら」 → 「出かける＋なら」

b. (1b)の従属節「出かけるのなら」 → 「出かけるの(だ)＋なら」

(1a)の場合、(2a)のように「出かける」に条件形式ナラが接続されたものであるが、(1b)は(2b)のように「出かけるの(だ)」、つまりノダ文にナラがつき、ノナラという形式になると考えられる。したがってナラとノナラの相違に、ノダの持つ機能が関係していると考えるのは自然である。本稿では以上のような構造的分析に基づき、ノナラが持つ特徴がどのようなものであるかを考察する。

次章では、ナラ及びノナラに関する先行研究を概観し、問題点を提示す

る。第三章ではノダの意味機能について説明した上で、ノダから受け継ぐノナラの機能を分析し、ナラとノナラの違いを明らかにする。第四章で、これまでの研究で主張されてきたノナラの機能を再考し、本稿におけるノナラの考え方をまとめる。最後に今後の展望を述べる。

2. 先行研究

この章では、ナラとノナラについてのこれまでの研究を概観し、問題点をまとめる。

2.1 ナラ

ナラは代表的な条件表現の一つとして、同じく条件形式といわれるト、バ、タラ等との用法の比較がこれまでも盛んに行われてきた。一般にナラがト、バ、タラとは異なった振る舞いを見せる（藤城・宗意2000、田中2001他）と言われるのは次のような特徴によると多くの研究で示唆されている。ここでは、蓮沼・有田・前田（2001：69）によるナラの説明を(3)に挙げる。

- (3) ナラは、事柄と事柄の関係を表すのではなく、事柄に対する話し手の判断に基づいた関係を表すという特徴があります。

ナラの持つ(3)の特徴については、角田（2004）による条件節と主節のモダリティの共起関係についての分析でも明確に説明されている。角田によると、ト、バ、タラで導かれる条件節の場合、主節との関係は主に出来事と出来事としてのつながりである。これに対し、ナラで導かれる節は、主節の事態ではなくモダリティと結びついているため、他の条件節とは主節との接続のレベルが異なるという。

- (4) a. 花が咲くと、実になる。
b. 花が咲くなら、実になる（はずだ）。

(4 a) のトを用いた条件文では、従属節の事態が主節で表された事態を引き起こすという関係である。一方(4 b) のナラを用いた場合では、「従属節の内容を前提として、主節では話者の意見、判断、命令などを述べてい

る」(p.57)。つまり、(4a)の主節「実がなる」が単なる事態描写であるのに対し、(4b)の主節は話し手の判断を表すモダリティ表現であり、括弧に示したようなモダリティ形式を付け加えても意味は大きく変わらないのである。

蓮沼・有田・前田はこのようなナラの機能を「話し手の判断の仮定を表す」とまとめた。また、同じような説明が蓮沼(1985)、益岡(1993)においても見られる。ちなみに、上のナラに関する記述においてナラとノナラは区別されておらず、どちらの形式を用いても上述した機能に変化は生じないと見ていることがわかる。

2.2 ナラとノナラ

2.1で述べたように、多くの研究ではナラが他の条件形式と比べてどのような用法上の違いがあるかに焦点が置かれていた。一方ノナラについては、形式的にも機能的にもナラと区別されないのが普通である。ただし、いくつかの研究においては、ノナラが必ずしもナラと同じ環境で用いられないことにも言及している。

例えば、蓮沼・有田・前田はノナラに置き換え不可能なナラとして、次の二つの場合を挙げている。一つは「タ形+ナラ」で仮定を表す用法である。これは事実と反する仮定を表す場合もある。例を以下の(5a)、(5b)に挙げる。もう一つは基本形+ナラで主題を表す用法で、(5c)がその例である。

- (5)a. 今度の数学の試験で、60点以上とれなかった {なら/×のなら}、
数学科に進むのをあきらめるよ。
- b. もっと早く起きていた {なら/×のなら} きれいな朝日を見られ
ただろう。
- c. 大阪で花見をする {なら/※のなら}、造幣局がおすすめだ。¹⁾
(蓮沼・有田・前田2001:68)

以上の置き換え不可能なナラとノナラを提示した上で、蓮沼・有田・前田はノナラの説明として、「ナラの用法のほとんどは、ノナラ（またはンナラ）を使っても表すことができる。その場合は、ノナラはナラの意味を強める働きを持つ」(p.67)と説明している。しかし、一体ナラの意味を

どのようにノナラが強めているのか、また、ナラとノナラがほとんど同じ用法で用いられるものの、どうしてある場面では用法に違いがでるのかということについて十分に説明がなされたとはいえない。

藤城・宗意（2000：85）は、基本的にナラとノナラを区別せずに考察を進めてはいるが、両形式の相違点についても言及している。それによると、ノナラはナラよりも「現実の状況や文脈に、より即した形で事態を提示する表現」であり、これはノダの性質、特にノの「事態を現状のありさまのまま捉える」という性質から生じるものだとしている。

ノダとの関連でナラとノナラの違いについて言及したものには、他に田野村（2002）や野田（1997）などがある。田野村は、「実情を表す」という自身の設定したノダの機能に従い、ノナラも「（ある事情 α における）実情が β であるなら」という意味になると述べている。しかし、ナラという表現自体がそもそも実情を仮定するという用法を持つため、両形式は同義であると結論づけた。²⁾ また、野田もノナラがノダの性質を持つとしながら、ナラとの違いはほとんどないと述べている。以上のように、ノナラをノダと関連づけて考える場合でも、両形式の違いはほとんどないと結論づけられることが多い。

2.3 先行研究の問題点

これまでのノナラに関する研究の共通点として次の二点が挙げられる。第一に、ノナラはナラとほとんど区別されずにその意味や用法が分析されている。第二に、ナラとノナラには用法において違いがあるということが確認されているものの、その違いがどうして生じるかという疑問については十分な考察がなされていない。

これまでの研究に対して、本稿では、ナラとノナラに機能的な違いがあるという考えをとる。そして、やはりその違いはノナラが接続する節にノダの持つ意味機能が表れることから生じるものであると考える。多くの先行研究では、ナラとノナラの違いはない、または「微妙である」（野田1997：158）としている。そもそも文末にノダが使われる場合でも、使われない場合とはその違いがしばしば微妙である場合があった。しかし、ノダが従属節に用いられる場合の機能をより詳しく分析してこそ、その他の従属節にノダが用いられる場合（例えばノダカラやノダガ等）、ひいてはノダ文自体の機能がより明確になると思われる。その意味でノナラの機能を再

考することはノダの研究においても重要である。

次章では拙論（中野2004a,b）で定義したノダの機能を確認し、これを基にノナラの特徴を分析する。これまで指摘されてきたナラとノナラの用法上の違いについても、その相違点が生じる具体的な根拠を、ノナラの特徴を明らかにすることで解明する。

3. ノダの機能から生じるノナラの特徴

本章では先行研究における問題点を解決するべく、ノダの機能によって生じるノナラとナラの違いを分析する。

3.1 ノダの機能

日本語の文末形式ノダについては、その意味機能を分析した先行研究が多く存在する。本稿では拙論（2004a）で定義したノダの意味機能に従う。拙論（2004a）でのノダの定義を(6)に提示する。

(6) 「のだ」の機能 ー既定化

「のだ」は、命題が話し手の情報領域に既に存在している事柄であると、話し手自身が主観的にみなしていることを明示する。

（中野2004a：26）

拙論（2004a）では神尾（2002）の「情報のなわ張り理論」を基にノダを分析した。(6)の「情報領域」とは、神尾の「情報のなわ張り」と言い換えられる。すなわちある情報は話し手または聞き手の情報領域（なわ張り）に属しており、それが言語形式、特に文末形式に言語化される。ある情報が話し手の情報領域に属するということは、その情報についての話し手の認識度が高い、つまり話し手はその情報を確信しているということである。文末形式ノダが用いられた場合、その文の情報は話し手の情報領域に属することを表す。しかも、その判断は話し手の主観的なものであるため、通常話し手の情報領域内に入り得ないとみなされるような情報でも、話し手のみが「自身の情報領域内にある」と認めれば、そのように言語化できるのである。

以下の(7)でノダが用いられていない断定の文、そしてノダ（ンダ）を用いた文を見たい。

(7a) 僕は庭付きの家が欲しいな。

b. (あの人は) 自分が巧く踊れないもんで、仲間が欲しいんだわ。

(森本薫『華々しき一族』)

c. 昨日、あの人がここへ来たようなのだ。

(7a)のように「述語で言い切った文、それに「よ」「ぜ」「わ」などの終助詞が付加された文など、断定的かつ確定的な表現の文」(神尾2002:20)は話し手の情報領域に属する情報を提示している。これらの文末形式を神尾は「直接形」と呼ぶ。この類の文は客観的にも、つまり聞き手や第三者から見ても、提示される情報が話し手の情報領域内であることは妥当だと認められる。(7b)のノダ文で提示された情報も、(7a)と同じく話し手の情報領域に属する。直接形の文と異なるのは、当該の情報が話し手の情報領域に属するかどうかの判断が客観的に認められることを必要としない点である。例えば、(7b)のような話し手以外の第三者の心理(あの人が、「仲間が欲しい」こと)は、日本語の場合、話し手の直接知り得ない情報であるとみなされる。このような情報は、話し手の情報領域に属するはずがなく、直接形の文では表すことができない。しかし、ノダを用いることで、「あの人は、仲間が欲しい」という内容が話し手の確信している情報であり、つまり話し手の情報領域に入る情報だという判断を、話し手自らがしたと明示される。(7c)も、推量を表す「ようだ(ような)」があることから、当該の情報は話し手の直接経験から得たものでない。したがって、通常はこのような情報も話し手の情報領域に属さないが、話し手は自身の情報領域内に「昨日、あの人がここへ来たようだ」という推量が属するという判断をノダによって明示したのである。³⁾

また、ノダによって表される情報は、話し手の認知過程において既に何らかの処理がなされていることも、直接形の文と異なる点である。⁴⁾以上の特徴をもつノダの意味機能を拙論(2004a)では「既定化」と名づけた。ノダ文は、直接形の文と同じく、話し手の情報領域に属する情報を提示しながらも、その位置づけの方法は直接形で提示される内容と異なり、話し手が主観的に自らの情報領域に位置づけた情報が言語化されているのである。

ナラとノナラの違いも、それぞれが導く従属節(以降、それぞれナラ節、ノナラ節と呼ぶ)の情報が話し手の情報領域内に位置づけられるかどうか

ということで生じると本稿では考える。ノナラ節が提示する情報は、ノダ文の情報と同じく、話し手の主観的判断によって自身の情報領域内に位置づけられたものである。一方、ナラ節の情報は、以下でも述べるが、話し手の情報領域に属するとは考えにくい。ナラ節は主節の判断の条件となる情報を仮定するだけにすぎないようである。話し手がある情報を自身の情報領域へ位置づけるかどうかという認知判断によって、ナラとノナラに機能的な違いが生じると本稿では考える。以下では、ノナラの情報が話し手の情報領域に位置づけられることによってナラとどのような違いが生じるかを具体的に分析する。

3.2 ノナラの機能

ここでは、3.1で紹介したノダの機能に基づき、ノナラが持つ機能、及びナラとの違いを述べる。ノナラの機能として、大きく分けて二つの機能の存在が確認できる。一つは、ノナラ節の情報が話し手の情報領域に位置づけられることによって生じる「既定化」機能である。そしてもう一つは、ノナラ節の情報を主節で表される判断の条件として主観的に提示する機能である。

3.2.1 情報の既定化

ノナラの機能の一つとして、まず情報の「既定化」を取り上げる。この機能も、そもそも3.1で提示したノダの機能がノナラに表れたものである。本稿では、ナラ節が主節の条件となる内容を単に「仮定」し、自身の情報領域に位置づけないのに対し、ノナラ節はある事態を既に話し手の情報領域内にある情報として提示するという機能的な違いがあると考ええる。ノナラが前接する情報を既定化することによって、ナラの場合とはどのような違いが生じるかを以下で詳しく見ていく。

既に2.2で示したように、蓮沼・有田・前田（2001）は、ノナラに置き換えられないナラとして未来や現在のことを仮定する「タ形+ナラ」を挙げている。

- (8)a. 今、電話で好きだと告白したなら、あの人はきっと驚いてしまうだろう。
- b. 今回の数学の試験で60点以上とったなら、数学科に進むことにな

るよ。

(蓮沼・有田・前田2001:58)

b'. 今回の数学の試験で60点以上とったのなら、数学科に進むことになるよ。

(8a)(8b)のナラ節では、未来（または、近い未来）のある時点において実現したと仮定された内容が提示されている。つまり(8a)の「今、電話で好きだと告白した」、また(8b)の「今回の数学の試験で60点以上とった」という内容は、発話時点の現実世界においては真ではない。現実世界において真でなければ、通常その情報は話し手の情報領域に属さない。ナラ節では、現実世界における真偽を問うことなく、つまり話し手の情報領域には存在しない情報でさえも、主節の判断の条件として提示できるということである。このようなナラの用法は、タラ、バなど他の条件形式に見られる「仮定条件」の用法と同じであるといえる。実際(8a)(8b)はナラをタラやバに置き換えることもできる。

一方、ノナラ節では話し手自身の情報領域に既に存在する情報が提示される。ノナラ節の情報は、少なくとも話し手自身は真であるとみなしている事柄なのである。例えば(8b')のノナラ節で提示された内容（「今回の数学の試験で60点以上とった」）は、話し手が誰かから聞くなどして得た、既に完了した事態だと解釈できる。つまり、話し手はこの情報を現実世界で起こった事態とみなしており、それを主節で述べる判断の前提として提示したのである。

ナラがノナラに置き換えられない場合をもう一つ見ていこう。ナラ節では事実と反する事態を仮定することができるのに対し、ノナラ節では不可能である。

(9)a. あの人の前で自分をさらけ出すことができたなら、今、こうして悩むことはないのに。

(蓮沼・有田・前田2001:59)

b. ?あの人の前で自分をさらけ出すことができたのなら、今、こうして悩むことはないのに。

(9a)では、ナラ節で提示された事態が現実世界において真でないことが既にわかっているが、あえてその情報を仮定し、それを条件とした場合の事態を主節で述べている。しかしノナラが用いられる場合、条件節で提示

した情報は既定化されている。当該の情報が既に自身の情報領域に存在していることを表すのである。条件節の情報が真ではないと話し手自身が確信している場合、ノナラによって条件節の情報を既定化すると矛盾が生じる。したがってノナラ節では事実に反する仮定が提示できないのである。(9b)も、ノナラ節の内容を「現実世界において偽である」と解釈するのは不可能である。逆に、ノナラ節の情報(「あの人の前で自分をさらけ出すことができた」)が、現実世界において成立した事態として話し手に認められているという解釈が可能になる。

以上のように、ノナラは条件節の情報を既定化する、すなわち情報が話し手の情報領域に既にあるものであるということを表す。ナラのように真実ではないとわかっている情報を仮定し、それを条件とした判断を述べることは、ノナラでは不可能である。⁵⁾以上をまとめると(10)のようになる。

(10) ナラとノナラの使い分け

	話し手が情報を自身の情報領域に位置づける	話し手が情報を自身の情報領域に位置づけない
現実世界において真の情報	ノナラ	ナラ
現実世界において偽の情報	ノナラ (特別な語用論的機能)	ナラ (事実に反する仮定)

(10)では、現実世界において真の情報と偽の情報が、それぞれ話し手の情報領域に位置づけられるかどうかによってナラとノナラが使い分けられることを表している。話し手が、現実世界において真の情報を自身の情報領域に位置づけられればノナラが用いられ、位置づけなければナラが用いられる。話し手が、現実世界において偽の情報を話し手の情報領域に位置づけずに提示する場合は、事実に反する事態の仮定による条件文となる。一方、現実世界において偽の情報を話し手が自身の領域に位置づける場合もある。通常、事実に反する事態は話し手の情報領域に属さない。しかし、そのような情報を話し手の判断によって、あえて自身の情報領域に位置づける場合、特別な語用論的解釈が可能になる。このような場合、ノナラ節に続く主節においても真実とは信じ難い内容が表現される。二つの疑わしい内容

を条件文でつなぐことで、さらにノナラ節の情報が信じ難いということを明示することになる。つまり、このような場合、文の焦点はノナラ節にあり、その情報の疑わしさを表明するためにノナラを用いた条件文が使用されると考えられる。

- (11) 東ちづるも（衆議院選挙に）立候補するの？そんなんでもいいんなら、SMA Pだって（立候補しても）いいよね。

（2005年8月17日 筆者の家族の発話より）

(11)では、話し手自身もノナラ節の情報を疑わしいと思っている。しかし、その情報をあえて話し手自身の情報領域に入れ、それを前提として主節でも話し手自身成り立つのは難しいと思う情報を提示する。これにより、話し手が文全体の内容を疑わしいと感じていることを強調するのである。このような用法は、通常のノナラ節とは異なる語用論的機能をねらったものと考えられる。

本節では、ノナラが主節の条件となる情報を話し手の情報領域に位置づけて既定化していることを表しており、ナラとは異なる機能を持つと考察した。これにより、ノナラには置き換えられないナラがどうして生じるのかが明らかになったと思われる。

3.2.2 主観的な判断による条件化

前節でノナラにはノダから受け継いだ既定化の機能があることがわかったが、ここではもう一つ、3.1で提示したノダの機能がノナラ節に表れる場合を見る。

ノダ文の情報は、話し手の主観的判断によって自身の情報領域に位置づけられる。同じように、ノナラ節の情報も話し手の情報領域にあるかどうかということについて客観的立場からの判断を必要とせず、話し手の判断のみで決定される。逆に、客観的な立場からも話し手の情報領域に当然属するだろうと思われる情報をわざわざ主観的に既定化すると、不自然な文になったり、通常とは異なるニュアンスを聞き手が感じたりすることになる。

- (12a. {わたしが／あなたが／彼が} パーティーに行くなら、主人も行

くと言うでしょう。

- b. {?わたしが／あなたが／彼が} パーティーに行くのなら、主人も行くと言うでしょう。

(12a)で、ナラ節の主語は一人称、二人称、三人称のいずれにおいても自然である。一方、(12b)ではノナラ節の主語として一人称が用いられると文は不自然になる。これはノナラ節で提示される情報の判断があくまで話し手自身の主観的な判断であることに関係する。つまり、話し手自身の行動であれば、わざわざノナラを用いて「話し手の情報領域に属すると話し手自身の判断でみとめる」と明示する必要はないのである。

また、不特定多数の人物による行為をノナラ節で提示する場合も、ナラ節とは異なる解釈を導く。これは蓮沼・有田・前田(2001)でも指摘されていたが、その原因は言及されなかった。以下の(13a)のような広告でナラ条件文が用いられた場合、ナラ節の主体として不特定多数の人物が設定されていると考えられる。

- (13a. 本を売るならBOOK OFF (広告より)
b. 本を売るのならBOOK OFF

一方(13b)の場合、聞き手(読み手)はノナラ節の主体がある特定の人物だと解釈するのが普通である。ノナラ節の情報は話し手自身の判断によって既定化されているわけだが、その情報が一般的行為では、「話し手の主観的判断で自身の情報領域に入れる」という既定化行為の必要性を感じないからだと考えられる。

ノナラ節の情報は3.2.1で見たとおり既定化されているが、これは話し手の主観で行われるものである。したがって、ノナラ節の情報として、通常話し手が自身の情報領域に主観的判断で入れる必要のないものを提示すると不自然になったり解釈が異なったりするのである。

3.3 ナラとノナラの違い

以上、これまで機能的に区別されてこなかったノラとノナラの違いを考察してきた。まとめると、次の二つの点でノナラはナラと異なる。

まず、ナラはある情報を単に「仮定」して主節の判断の条件として提示

するが、ノナラは情報を「既定化」して主節の判断の条件とする。未来における仮定や、事実に反する仮定による条件文において用いられるナラをノナラに置き換えることができないのは、ノナラに既定化機能があるためである。

また、ノナラが用いられることで、話し手がより個別的な事柄を主観的に既定化していると聞き手によって解釈される。一般的行為を主題として提示するナラをノナラに置き換えられないのは、ノナラが話し手の主観的判断を表すからである。以上のようなノナラの二つの特徴は、いずれもノダ文の持つ機能をノナラが受け継いだことで生じるものである。

4. 他の条件形式とノナラの違い

前章では、これまで用法的に区別されることのなかった条件形式ナラとノナラに機能的な相違があることを考察した。ノナラがノダ文の機能を受け継ぎ、ナラとは異なる機能を持つことを前提としたことで、これまで詳しい説明がなされなかったナラとノナラの用法上の相違についても明確な根拠を見出すことができたと考ええる。

最後に、これまで定義されなかったノナラの特徴について再度考察してみたい。角田（2004）は、従属節と主節の関係について、ナラが他の条件節のように事態と事態の結びつきではなく、従属節が主節の「判断の根拠」、または「発話行為の前提」として提示されると述べた。本稿のこれまでの考察を踏まえると、ナラのこれらの特徴は、実はノナラが典型的に持つ特徴であると考えられる。ナラにおける従属節と主節の関係においては、しばしば事態と事態の結びつきではないかと思えるものも多い。例えば、(6a) (6b)の場合、以下の(14a) (14b)でわかるとおり、タラやバへの言い換えも可能であり、事態と事態の結びつきと考えてもよさそうである。

(14a) 今、電話で好きだと告白 {したなら／したら／すれば}、あの人はきっと驚いてしまうだろう。

b. 今回の数学の試験で60点以上 {とったなら／とったら／とれば}、数学科に進むことになるよ。

一方、本稿の考察を踏まえると、ノナラ節の条件文は Sweetser (1990) の言うところの “given conditional” (p.128) に当てはまる。“given

conditional”とは、“already being accepted as certain in the minds of speaker and addressee” (p.126)、つまり話し手と聞き手の両方に既に認識されたことを条件とする場合である。本稿では聞き手による事態の認識については触れていないが、ノナラ節が提示する「話し手の情報領域に属する」情報は Sweetser の “given conditional” にも対応する。また、Sweetser (1990 : 128) はこの “given conditional” が content domain、epistemic domain、そして speech-act domain のうち、epistemic domain あるいは speech-act domain の条件文であると説明している。角田はナラの特徴としてあげた「判断の根拠」「発話行為の前提」が、それぞれ Sweetser の epistemic domain、speech-act domain にほぼ対応するとしているので、結局ノナラは主節の「判断の根拠」あるいは「発話行為の前提」を表すものと結論づけることができる。角田は、自身が設定したⅠからⅤの従属節と主節の接続レベルのうち、ナラを「Ⅳ「判断の根拠」、Ⅴ「発話行為の前提」の接続関係を専用に表すもの」(p.60-61)として説明しているが、これはナラとノナラが区別されなかったためにこのような結論が生じると考えられる。Sweetser の given conditional の定義にあわせるとすれば、ノナラこそ「判断の根拠」や「発話行為の前提」の接続関係を専用に表すものである。

5. おわりに

本稿では、条件形式ノナラがノダの機能を受け継ぐことでナラとの相違が生じることを確認し、ノナラの機能を考察した。その結果、ナラとノナラの用法上の相違は、ノナラがノダから引き継いだ機能によって説明できることが明らかとなった。また第四章では、これまで角田がナラの特徴としてきたものが、実はノナラが専用にもつ特徴であるという考察も加えた。

本稿は、これまで同じだと考えられてきた二つの形式の相違について明らかにしたという点でも意義深いと思われるが、同時にノダにおける拙論 (2004a, b) の定義が、主節だけでなく従属節の機能を分析する上で適用できることを証明した点においても、他の関連する研究の参考になると思われる。今後、ノナラと同じく、ノダが関係していると思われる従属節、また主節のノダの意味機能に関しても、さらに解明されていくことが期待される。

注：

- 1) (5c)の※について、「「のなら」に置き換えた場合、特定の人の行為の意味になり、一般的行為、主題という意味にならない。」(蓮沼・有田・前田2001:68)という説明が加えられている。
- 2) 田野村はナラとノナラの用法の違いについても説明しているが、これはナラに「状況設定」という別の機能があり、この意味でナラが用いられる場合はノナラに置き換えられないということである。
- 3) 「情報のなわ張り理論」に基づいたノダの機能については拙論(2004b)でも詳しく取り上げている。
- 4) 角田(2004)では、このノダが明示する「何らかの処理」をノダの「認知プロセス」としてまとめている。
- 5) ただし、ノナラにおける「ある情報が自身の情報領域に属する」という判断は、あくまで話し手自身の判断に拠るものである。したがって、例えば現実世界においてまだ実現していなくても、話し手自身が未来に実現すると確信している事柄であれば、既定化できる。また、客観的には実現しないと思うことでも話し手自身の判断で既定化できる。このようにノナラが現実世界において実現していない情報も提示できるのであれば、ナラと違いがないようでもある。それがこれまでナラとノナラの区別が難しい原因の一つだったともいえる。

参考文献：

- 神尾 昭雄 (2002) 『続・情報のなわ張り理論』 大修館書店
- 田中 寛(2001)「なら節条件文における発話意図—前提情報と事態認識—」『語学教育研究論叢』第18号 pp.307-326
- 田野村 忠温 (2002) 『現代日本語の文法 I 「のだ」の意味と用法』 和泉書院
- 角田 三枝 (2004) 『日本語の節・文の連接とモダリティ』 くろしお出版
- 中野 友理 (2004a) 『日本語の「のだ」文の持つ特性と言語普遍性—韓国語との対照から—』 平成15年度北海道大学大学院国際広報メディア研究科修士論文
- 中野 友理 (2004b) 「「情報のなわ張り理論」における「のだ」の位置づけ」『北海道大学留学生センター紀要』第8号 pp.28-45
- 野田 春美 (1997) 『の(だ)の機能』 くろしお出版

- 蓮沼 昭子 (1985) 「「ナラ」と「スレバ」」『日本語教育』56号 pp.65-78
- 蓮沼昭子・有田節子・前田直子 (2001) 『日本語文法 セルフマ스터シリーズ7 条件表現』くろしお出版
- 藤城浩子・宗意幸子 (2000) 「(ノ) ナラの意味と特徴」『三重大学日本語学文学』第11号 pp. (15)-(26)
- 益岡 隆志 (1993) 「概説 日本語の条件表現について」益岡隆志編『日本語の条件表現』くろしお出版
- Bolinger, D. (1977) *Meaning and Form*. Longman.
- Sweetser, Eve E. (1990) *From Etymology to Pragmatics: Metaphorical and Cultural Aspects of Semantic Structure*. Cambridge University Press.

なかの ゆり (留学生センター非常勤講師)

NARA and *NONARA*

NAKANO, Yuri

This paper aims to examine the function of *NONARA*, a conditional marker in Japanese. Although it has been stated that *NONARA* and *NARA*, another Japanese conditional marker, do not differ in meaning, we believe that there are some differences in use between these two forms. This is because *NONARA* inherits characteristics from *NO-DA*, a Japanese sentence-final marker. This paper clarifies the differences based on the function of *NO-DA*, which has been analyzed in terms of speaker's information territory by Nakano (2004a, b).

NONARA has two significant functions not possessed by *NARA*. One is that the content of subordinate clauses marked by *NONARA* is located in the speaker's information territory, which means that the speaker is sure of the information in the *NONARA*-clause. The other is that locating the content of subordinate clauses in the speaker's information territory depends on the subjective judgment of the speaker. This feature of *NONARA* results in unnatural sentences when information which is objectively true is introduced in *NONARA* clauses.

Although the function of *NO-DA* has been generally ignored when it appears in subordinate clauses, we show that it indeed plays a significant role in such clauses. We also demonstrate that the two forms have significant differences from the cognitive point of view.